

(東南アジア・レポート)

マレーシア・サラワク州における
複合民族社会の政治事情

伊 藤 潔

はじめに

ボルネオ(カリマンタン)島の西北部に位置するサラワク(Sarawak)は、マレーシア一三州の中でも面積が最も広い州である。複雑な民族で構成される、いわゆる複合民族国家マレーシアにあって、サラワク州の民族構成は分けても複雑であり、その歴史の展開もまた極めてドラマチックである。「事実の小説よりも奇なり」とは、まさにサラワクの歴史そのもので、白人(イギリスのブルック家)の百年の支配の後、日本の三年八ヵ月の占領・軍政、イギリスの直轄植民地を経て、華人の反マレーシア運動のただ中で独立して、一九六三年に連邦国家マレーシアの一州となって今日にいたっている。

サラワクには五、六〇年前まで、いわゆる「首狩り」で男の勇気を示し、頭骸骨の数で女性の愛を勝ち獲る風習の民族があり、つい一〇数年前まで、共産ゲリラがジャングルで熾烈な戦いを繰り広げてきた。それにもかかわ

らず今では、アジア諸国における議会制民主主義が最も発達している地域の一つである。諸民族の利害の衝突は、ほとんど議会制民主主義と法の支配および政党政治を通じて、回避されてきた。共産ゲリラの問題も、結局は力づくではなく、政治的に解決された。

サラワクのみならず、複合民族社会の政治の最大の課題は、常に諸民族の利益の調整である。サラワクでは、マラヤ連邦以来の政治慣行すなわち民族ごとの政党がそれぞれの民族の利益を代表し、諸民族を代表する各政党が連合することによって調整されており、この傾向は近年とくに顕著である。

小稿は断片的な史料をもとに、政治史を中心にサラワクの略史を組み立てながら、一九八七年三月に起きた政治危機までを回顧し、その民族構成に絡む政治状況の整理を試みるものである。本紀要一三号の拙稿「マレーシア・サバ州における複合民族社会の政治事情」(以下「紀要⑬」とす)に続くものであり、重複を避けるため、サバ州と共通する政治的な一般状況についてはなるべく省略した。したがって必要時には「紀要⑬」を参照されたい。記述に関する典拠について、筆者の直接取材によるものは☆印で示した。なお筆者は一九八七年夏、二泊三日にわたり、サラワク共産ゲリラの元司令官黄紀作氏と会談した。この会談記録に基づく記述については、とくに「黄紀作談」とした。

風土・民族・宗教

サラワクはボルネオ島の西北部に位置し、南シナ海に面している。その面積は約一二万五〇〇〇平方キロ(マレーシア全土のおよそ五分の二にあたり、これは日本の国土の約三分の一にも相当する)、北は九〇〇キロにお

よぶ海岸線、南は長い山脈がインドネシア領のカリマンタンと天然の境界をなしている。したがって河川のはほとんどは南から北に流れ、南シナ海に注ぐ。領内の東北部にはブルネイ王国があり、さらに東はマレーシアのサバ州と隣接している。⁽¹⁾ 州の三分の二以上の領域は、濃密な熱帯雨林で覆われ、サバにも増してマレーシア随一の南洋材の産地である。しかし最大の資源である森林は、域内の陸上交通を妨げる一方、その利権をめぐる「木材政治」を醸生している。域内の交通は、今でも河川と海に大半を負っており、都市間の航空輸送が比較的発達しているため、陸上交通の整備はますます立ち遅れているのが現状である。⁽²⁾ 交通不便がいわれるマレーシアの半島部(マラヤ)と比較しても、幅員広大なサラワクの交通はさらに不便であり、各地に分布する諸民族の交流を妨げ、政治的な統合と活動にも影響を与えている。

サラワク最大の都市は、西部に位置する人口三〇万を擁する州都のクチン(Kuching)で、中部に位置する人口一二万のシブ(Sibu)、東部に位置する七万のミリ(Miri)がこれに次ぐ。サラワク川の中流にあるクチンは、政治・行政都市であるとともに中継貿易港でもあり、経済の中枢を担っている。シブはサラワク最大のラジャン(Rajang)川の下流と、幾つかの小河川の合流点にあたり、木材と農産物の集散地である。ブルネイに近く、南シナ海に面するミリは、石油精製の町であり、ブルネイ産の原油のほとんどもミリ郊外のロウトン(Lutong)に陸路で運び込まれ、精製されて南シナ海から海外に向け、積み出される。ちなみにサラワクは、木材の輸出と石油精製を通じて、日本とは今や極めて密接な経済関係にある。

*

*

*

一九八七年現在、サラワクの人口はおよそ一三〇万である。⁽³⁾ その内クチン、シブ、ミリの三都市とその周辺

に約五〇万人、そのほかは広大な農村や沿海地帯、河川地帯、丘陵地帯、山岳地帯に散在的に居住しており、人口の都市部集中が顕著である。

サラワクには、様々な民族が居住している。最大多数民族は「海ダヤク族(Sea Dayaks)」とも称されるイバン人(Ibans)の三二%、次いで華人が三〇%、マレー人が二〇%である。イバン人、華人、マレー人が州の主要民族をなし、「三大民族」といわれる。ほかに陸ダヤク人(Land Dayaks)八%、メラヌー人(Melanaus)五%、残り約七%の九万人弱を、内陸の山間部に散在するケニヤ人(Kenyah)、カヤン人(Kayan)、ケダヤン人(Kedayan)、ケラピト人(Kelabit)、ムルト人(Murut)、ピサヤ人(Bisaya)、バケタン人(Baketan)、サバン人(Saban)、プナン人(Punan)が占める⁽⁴⁾。マレー人と移住系の華人以外の原住民族は「ダヤク族」と総称され、広範に分布しているのに対し、マレー人は沿海および川沿地帯に居住し、華人は都市部に集中している⁽⁵⁾。

*

*

*

民族構成同様、宗教もまた複雑である。一九世紀以後、西欧諸国の宣教師によるキリスト教とカトリック教の布教の結果、イバン人と陸ダヤク人は、概ねそのいずれかの信徒となっている⁽⁶⁾。華人の多くは、南中国から持ち込まれた宗教を信仰している。華人はそれを「仏教」と自認しているが、強いて言うならば仏教を中心とした「雑教」と見なすべきものであろう⁽⁷⁾。一部の華人は、キリスト教またはカトリック教に改宗し、イバン人や陸ダヤク人の宣教師を勤めている者もある⁽⁸⁾。

マレー人は二〇%と数えられているが、この場合、宗教的な要素が極めて大きい。すなわち華人を除くすべての原住民族は、イスラム教に改宗することにより、マレー人と見なされ、このことはモスリム・マレー人を条件

とする「ブミプトラ」政策とも極めて深い関係をもっている。中でもメラヌー人の改宗が最も目立っており、今後も「統計上のマレー人」が増えることが予想される。⁽⁹⁾

複雑な民族構成と複雑な宗教を整理すれば、イバンのキリスト教、華人の仏教、マレー人のイスラム教、これが「三大民族」の「三大宗教」であり、その他は概して原始的なアニミズムである。マレーシアではイスラム教を国教と定める一方、信仰の自由を憲法で保障している。⁽¹⁰⁾ しかしながら、マレーシアの政治・経済・社会を論じるにあたっては、宗教が大変重要なファクターであることを見逃せない。

注(1) Tan Chi, "The Malaysia And Singapore Atlas" 1976, The World Book Co., Ltd. Singapore, pp. 15~7.

(2) サラワクの陸上交通は、極めて不便である。たとえば、西部の州都クチンから中部のシブへ行くには、飛行機を利用すれば約三〇分、船舶を利用すれば約四時間、急行バスを利用すると約八時間もかかる。船舶は一旦南シナ海を迂回するが、それでも地図上で見るとほぼ直線的に走るバスよりは速い。道路の整備状況の悪さはもとより、大小の河川および密林に阻まれ、実際の道路はかなり曲折が激しく、常に道路のどこかで不通箇所がある。飛行機は料金が高く、一般には利用できない。したがって交通の主力は水上交通である。

このような交通事情は、選挙運動にも大きな影響を与えている。とくに都市部以外の地方では、候補者および運動員が有権者に直接接触するには、大変な困難をとまなう。選挙に金がかかることは、交通手段の確保一つをとっても十分に理解できる。サラワクの政治を理解するにあたって、交通事情は大きな要素の一つである。☆

(3・4) Paolo Koch, "SARAWAK" 1987, Zollikon, Kuehling, p. 102.

(5) 『東南アジアを知る事典』(平凡社、一九八六年)「ダヤク族」の項参照。

マレー人は法制的には当然、「ブミプトラ(土地の子)」の範疇に入る。しかしながらサラワクでは、「ダヤク族」で総称される原住民族は、マレー人を必ずしも原住民族とは見ない。現地では、マレー人はスマトラやマラヤのジョホールから、ブルネイを経てサラワクに移住した外来民族としている。この点、民族ごとの政党再編成を考える上で、注意を要する。またサラワクのマレー人の言葉の訛りと意識も、マラヤのマレー人とは違いがあり、サバ州のマレー人同様、独特の「地域意識」を持っている。☆

(6) 楊啓明『砂勞越与其人民』第二冊(婆羅州文化局、一九七一年)七―四〇ページ。

(7) 東南アジアの華人の仏教徒は、概して「雜教徒」と見ても差し支えないであろう。その最も顕著なものは、「徳教」と称する新興宗教である。それは仏・道・儒の三教に、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教など世界の中心的な宗教を一堂に集め、祭るものである。☆

(8) イバン人や陸ダヤク人に対する布教は、一九五〇年代以降、ほとんどが華人宣教師によるものである。この点、華人とイバン人や陸ダヤク人との民族間の理解と融和に、大変役立っている。☆

(9・10) ブミプトラ政策については、「紀要⑬」一六四ページ、注(1)参照。

サラワクのマレー人は、民族構成の上ではごく少数であるが、ブミプトラ政策の恩恵に最も浴している。このことから、ダヤク族と総称される原住民族の中で、イスラム教への改宗が相次ぎ、とくにメラヌー人に多い。したがって「統計上のマレー人」は、今後とも増え続けるであろう。☆

(11) F.Trindade & H.Lee, "The Constitution of Malaysia" 1986, Oxford University Press, Singapore, pp.5-8. なおマレーシア憲法第三条第一項参照。マレーシアでは、モスリムであることがマレー人たる資格要件である。

白人王朝三代の百年

サラワクが歴史に登場するのは、大航海時代以降の一九世紀のことである。それまでは考古学的に、ニアア洞穴(The Niah Caves)の遺跡に、四万年以前に人間が生活していた跡が記され、一〇〇〇年以前からの中国の陶器と古銭が、各地で発見されていることから、古くから中国と貿易関係があったことも裏付けられている⁽¹⁾。

島嶼東南アジアの他の地域と同様に、サラワクも一二世紀頃に全盛を迎えた、南スマトラのスリビジャヤ帝国(Srivijaya Empire)の勢力下であり、この頃に仏教がもたらされたといわれる。下って一四世紀頃には、仏教のスリビジャヤ帝国に代わって、ジャワにヒンズー教のマジャパイト帝国(Majapahit Empire)が隆盛し、サラワクにもヒンズー教が伝わった。これらの事実は、文字による記録ではなく、いずれも残存する不完全な仏像とヒンズー教の神像からの推測によるものである。さらに一五世紀頃には、イスラム教のマラッカ王国が勃興し、マレー人を中心としたモスリムが、イスラム教を東南アジアの島嶼部に広め、各地に支配者としてのサルタンが生まれ、衰退しつつあったマジャパイト帝国勢力に取って代わった。この時ボルネオにも、各主要河川を中心たる重要な貿易拠点に、それぞれのサルタンが登場した⁽²⁾。中でもブルネイのサルタンの支配地域が広大で、サラワクもその支配下にあった。これら外来の宗教は、いずれもサラワクの沿海地方にとどまり、内陸部には浸透しなかった。

サラワクに対するブルネイの支配は、マラヤ各地のサルタン同様、人や土地に対するものではなく、いわゆる「河川封建制」⁽³⁾といわれるように、水上輸送に便利な河川に対するものであり、しかも「半独立的」な代官による

ものであった。それが一五〇〇年頃 of 最盛期を境に、衰微の一途をたどる。ブルネイの支配の弱体化とともに、サラワクでは諸民族間の抗争が激化する一方となり、海賊が横行し、イバン人の「首狩り」が頻繁に行われた。このような「無政府状態」が続いている間に、西ヨーロッパ勢力がサラワクの地に到着したのである。

*

*

*

イギリスは一八二四年の「英蘭協定」⁽⁷⁾により、マラッカ海峡の制海権を獲得するとともに、マレー半島を「勢力範囲」とし、マラヤ経営に専念する一方、ボルネオに対しても食指を動かしていた。海峡植民地総督の名代として、J・ブルック(James Brooke)が自ら所有の砲艦を率い、初めてサラワクを訪ねたのは、一八三九年のことであった。二年後の一八四一年にJ・ブルックは再びサラワクを訪ねた。折柄クチンの代官は、頻発する住民の反乱の制圧に苦慮しており、J・ブルックの助力を請い、鎮圧に成功した。その後もJ・ブルックはブルネイに協力して、海賊や首狩り族の横行の制圧に努め、これらの功績により年間二五〇〇ドルをサルタンに支払うことを条件に、クチンを中心とするサラワク川流域を支配する「ラジャ(Raja)」に封じられた。⁽⁸⁾

J・ブルックがラジャになって五年目の一八四六年、サルタンがJ・ブルックの追い出しを計ったため戦争となったが、イギリス海軍の応援のもとで、ブルネイの首都を攻略し、サルタンとの間にサラワクの無償割譲の条約が結ばれた。⁽⁹⁾ 条約の締結とともに独立が宣言され、サラワクに白人の王朝ができたのである。ちなみに同年、イギリスのビクトリア女王は、J・ブルックをラブアン(Labuan)⁽¹⁰⁾島の総督に任命した。⁽¹¹⁾

初代ラジャJ・ブルックは、在位二七年を通して势力的に王朝建設に努めた。政治の近代化はもとより、海賊の退治、首狩り風習の撲滅、産業の振興などに力を注ぎ、領土の拡大・略奪にも余念がなかった。それは時には

蚕食、時には鯨呑という手口で、ブルック王朝の領土は、初期のサラワク川流域から始まって、二代ラジャの一九〇五年には、今日のサラワク全域に拡大したのである。¹²⁾

*

*

*

初代ラジャ・ブルックは生涯独身であったことから、一八六八年に死亡すると、その甥であるC・ブルック(Charles Brooke)¹³⁾が二代ラジャに即位した。二代ラジャは一九一七年に死亡するまでの在位四九年間、初代ラジャにも増して王朝の建設に邁進した。C・ブルックがとった産業振興のための様々な施策の中で、特筆すべきは、積極的な労働力の導入、すなわち中国人移民の招来である。

従来 of 中国人労働者の東南アジアへの流入が、「苦力貿易(Cooly trade)」または「豚仔貿易(Pig trade)」¹⁴⁾といわれるようなものであるのとは対象的に、C・ブルックの場合は、移民の代表との間に契約を結び、その契約条項に基づいて移民を受け入れた。具体的には、旅費の政府負担、準備費の前貸し、それを年賦で返済するなどである。さらに移民が開拓した耕地(一人当たり約一ヘクタール)は二〇年間免税、二〇年後には年間地租一〇セントの代償で払い下げる。また政府は移住地に道路を建設し、港には埠頭を作るだけでなく、匪賊や海賊、首狩り族などからの襲撃にも責任を負い、移民が生産した農作物の自由売買を許すなど多岐にわたっている。¹⁵⁾これらは他の東南アジア地域には見られない、まさに画期的、近代的な移民受け入れである。

政府の保護のもと、相次いで中国からの移民が到来し、サラワクに新たな民族として参入した。この新参の中国人は原住の民族とは違い、勤勉と貯蓄と教育を民族の特性とし、これにより間もなくしてその勢力は、原住の諸民族を凌駕した。ブルック王朝下サラワクの建設に最も貢献したのは、ほかならぬ中国からの移民の人々であっ

た。⁽¹⁶⁾しかしその後、イギリス植民地主義に対する「反帝・反植・独立」運動⁽¹⁷⁾に、死力を尽くしたのも、この人々の子孫である華人であった。

さらにC・ブルックは、一九〇五年にはゴム農園を創設、一九一〇年にはミリに油田を開発、一九一五年には鉄道の敷設などを手がけた。⁽¹⁸⁾ことに鉄道は、クチンから南へ約一五キロという短かいものとはいえ、草深いボルネオの大地に、黒い鉄の塊が白い煙を吐いて疾走する姿は、頭骸骨の数で女心を射とめるイバン人はじめ原住民には、まさに植民者・支配者の「文装的武備」⁽¹⁹⁾を示し、圧倒するものであったに違いない。サラワクにおける治安の確立、経済建設の基礎を築いたのは、この二代ラジャC・ブルックの治世であった。

*

*

*

政治外交史的には、一八五〇年にアメリカ合衆国が、サラワク王国を承認した⁽²⁰⁾ことにより、王国は初めて国際的にその存在が認められた。J・ブルックは、一八五五年に「最高評議会(Supreme Council)」⁽²¹⁾を設置した。しかし、これは数名の政府高官により構成され、単に国家管理に関する合議機関に過ぎなかった。イギリスは一八六四年にサラワクの独立を承認し、翌年クチンに領事館を開設した。このイギリスの承認と同時に、最高評議会は「国家評議会(Council Negin)」⁽²²⁾となり、構成員に諸民族の酋長や指導者を加えた。しかし国家評議会は、ラジャの政府に対して政策の助言はできても、法律を制定する権限までは与えられなかった。一八八八年サラワクは、北ボルネオ(今日のサバ)とブルネイとともに、イギリスとの間に国防と外交を託す条約⁽²³⁾を結び、イギリスの保護領となったのである。

一九一七年、C・ブルックの死亡により長男V・ブルック(Vyner Brooke)が三代ラジャに即位した⁽²⁴⁾。V・ブ

ブルックも先代に続いてサラワクの建設に努め、その最大の治績は、一九三一年に諸民族の指導者を招集して開いた「平和会議」²⁵⁾である。これより以後、サラワク全域の治安は政府の掌握下となり、経済も順調に発展した。V・ブルックは一九四一年、ブルック王朝一〇〇年を記念して、立憲君主制を目指し、憲法制定に踏み切った。この欽定憲法は、従前の国家評議会の役割と構成員をさらに拡大し、国会が創設された²⁶⁾。国会には法律の制定および財政に関する、予算編成の権限が与えられた。しかも過去の評議会のようにラジャの恣意的な開会とは違い、憲法で国会の開会を年二回以上と定めている。同年一月には、第一回の国会が招集された。しかし、政府の諸改革が実行に移される直前に太平洋戦争が勃発し、サラワクの歴史は新たな局面を迎えたのである。

注(1・2) V.Mulle, "The Story of Sarawak" 1967, Oxford University Press, Kuala Lumpur, pp.1~4, 19~26.

(3) 鶴見良行『マラッカ物語』(時事通信社、一九八一年)一三〇~四〇ページ。

(4) V.Mulle, op.cit, pp.24~6.

(5) 劉子政『砂朥越古今談』(華英書店、一九五九年)二五~七ページ。

(6) Anonymous, "The Sea Dyaks and Other races of Sarawak" 1977, Borneo Literature Bureau, Kuching, pp.118~20. イバン人の「首狩り」の風習は、太平洋戦争後、教育の普及とともに、ほとんど見られなくなった。今日では頭骸骨をロング・ハウスの廊下に飾ることも、観光・撮影用のものもない。これは民族の自覚と、文明開化が著しく進んだことを示す。☆

(7) B.Harrison, "South-east asia A short history" 1972, The Macmillan Press, London, pp.171~89. この協定は、貿易拠点型植民地から領土型植民地への転換の始まりである。植民地主義者の都合だけが優先され、支配さ

れる地域の民族や文化などが、まったく顧みられなかった。今日の島嶼東南アジアの国境の大半が、この協定によって画定されたものである。

- (8・9) Reece, "The name of Brooke" 1982, Oxford University Press, Kuala Lumpur, pp.1~4. 前掲『砂朥越古今談』二九~三二ページ。V.Mulle, op.cit, pp.35~43. また「ラジャ」とは、王を指すインドからの用語である。前掲『東南アジアを知る事典』「ラジャ」の項参照。

- (10) ラブアン島は英領ボルネオに対する睨みをきかず、イギリスの軍事的な拠点であった。「紀要⑬」一八二ページ、注(3)参照。

- (11) V.Mulle, op.cit, p.42.

- (12) Reece, op.cit, pp.4~8.

- (13) Ibid., p.4, Anthony Brooke, "The Facts About Sarawak" 1983, Summer Times, Singapore, p.1.

- (14) 須山卓等『華僑』（日本放送出版協会、一九八一年）三六~五〇ページ。

- (15) H.Morrison, "SARAWAK" 1982, Times Books International, Singapore, pp.161~97. 前掲『砂朥越古今談』四二~五六、一〇一~五二ページ。

- (16) 田農『砂朥越華族社会結構与形態』（聯合文学出版社、一九七七年）四四~五六ページ。

- (17) 後述の華人政党「人連党」の結成、華人の反マレーシア運動、スリ・アマン・オペレーションのいずれも、その主役は華人である。

- (18) V.Mulle, op.cit, pp.60~3.

(19) 植民地支配は、武力という物理的装置を主に、文明の誇示を副にして、被支配者を圧倒することにより、従わせるのが一般的である。この文明の誇示が、すなわち「文装的武備」である。鶴見祐輔『後藤新平』第二巻「植民行政家時代」(後藤新平伯伝記編纂会、一九三七年)八一〇～八ページ。

(20) Anthony Brooke, op. cit. p. 1.

(21・22) V. Mülle, op. cit. p. 62～3.

(23) Reece, op. cit. pp. 10～1. 11) にいたってボルネオ島北部は、マラヤ同様に「英領」となったのである。

(24・25) V. Mülle, op. cit. pp. 65～6.

(26) Reece, op. cit. pp. 72～82.

占領から領土の譲渡へ

太平洋戦争の幕開きとほとんど期を同じくして、日本軍は油田を目指してミリに殺到した。一九四一年一二月一六日早朝のことである。ところがその二ヵ月前に、油田の重要施設のあらかたはイギリスの手によって解体され、シンガポールに移されていた⁽¹⁾。石油の入手不可能に落胆してか、イギリスの無抵抗に拍子抜けしてか、日本軍はミリから先になかなか進まなかった。また、ブルック家はじめイギリス人のほとんどが撤退したため、抵抗らしい抵抗もなく、日本軍は二四日午後、首都クチンに到着・占領した⁽²⁾。

ところが日本軍がクチンとミリにとどまったため、第二の都市シブをはじめ所々で無政府状態に陥り、略奪や首狩りが再発した。無政府状態で最も被害を蒙ったのは華人であり、中でもシブの華人商人の被害が甚大であつ

た。そのため、やむを得ずシブの華人は、代表三人をクチンに派遣し、日本軍のシブ駐屯を要請した。請われて、日本軍がシブに到着したのは、一九四二年一月二九日のことである。⁽³⁾ 太平洋戦争中に、日本軍が請われて占領した例は、おそらくシブだけであろう。しかも華人の要請であったことは興味深い。マラヤ占領に際しての、華僑・華人の、イギリス人にも増しての日本軍に対する激しい抵抗に比べて、この「占領要請」は、雲泥の違いである。

サラワクを占領した日本軍は、手始めに地名の変更に着手し、例えばクチンを「久鎮」、シブを「志布」と改めた。次いで物資の調達、奉納金と人頭税の徴収、強制労働、軍票の発行などを強行し、やがて戦局が不利になるに連れて、番号のない軍票が大量に乱発された。三年八ヵ月におよぶ占領軍政の結果、サラワクでは生産が停滞し、生活物資の欠乏とインフレが著しく進み、市民生活は大きな打撃を蒙った。その状況は、サラワクの「暗黒時代」とさえいわれている。一九四五年八月一五日にいたり終戦を迎えたが、サラワクはほぼ一ヵ月後の九月一日、オーストラリア軍の到着をもって日本軍の占領を解かれた。ちなみにこの日を「平和記念日」として、サラワクの祝日に定めている。⁽⁴⁾

*

*

*

日本軍の撤退と入れ代わりに、ブルック家がサラワクに戻ってきた。しかし、荒廃した国土を再建するには、ブルック家の力だけでは不可能として、三代ラジャV・ブルックは、ついにイギリスへの「領土の譲渡」を申し出た。⁽⁵⁾ 領土譲渡の申し出を受けて、イギリス政府はサラワク住民の意思を確認するための調査を行った。調査報告では、住民の大多数は譲渡に賛成しているとされている。イバン人をはじめとする原住民族は、民度が低い

め、事の重大さについての正確な認識がなく、華人は第二次世界大戦後の、中国の国共内戦に関心を奪われ、また譲渡といってもイギリス人の支配に変わらないことから、この問題に殆ど関心を払わなかった。⁽⁶⁾ただマレー人だけは、バンダ(Datu Bandar)率いる賛成派と、パティンギー(Datu Patinggi)率いる反対派の二派に分かれ、領土の譲渡に反対・抗議して、約三〇〇人のマレー人公務員が辞職した。⁽⁷⁾

翌一九四六年の五月、サラワクの国会は譲渡問題を討議した。その結果、譲渡に賛成する一九票と反対する一六票の三票差で、イギリスへの譲渡と直轄植民地(Crown colony)になることが決定した。この国会決議を受けて、イギリス議会も同年七月一日に、サラワクを直轄植民地として受け入れる決定をしたのである。⁽⁸⁾白人ラジャ三代一〇〇年の支配の終焉である。

*

*

*

領土の譲渡に反対したのは、マレー人だけではない。ブルック家内部にも激しい反対があった。そもそも領土の譲渡という道を選択しなければならなかったのは、三代ラジャV・ブルックに子供がなかったことと、その即位に際して、重大な条件があったからであった。次男に王位を相続させたかった二代ラジャC・ブルックが、長男V・ブルックの在位期間を一九四五年までに限定し、その後は次男に譲ることを定めていたのである。この条件は、いわばブルック家の「お家騒動」の結果であった。⁽⁹⁾弟と対立するV・ブルックは、弟に王位を譲るくらいならば、イギリスに譲渡した方がましと考え、日本軍占領下の破壊を理由に、譲渡に踏み切ったのである。

一方、王位にありつかなかった次男一族は、その長男のA・ブルック(Anthony Brooke)を中心に、反対派のマレー人を抱き込み、反対運動を続けた。譲渡に反対するマレー人もまた、ブルック家内部の反対運動に勇気づ

けられ、「マレー青年会」を中心に、譲渡の交渉が表面化するや、「サラワク譲渡反対協会」を結成した。⁽¹⁰⁾そしてサラワクの自治・独立を求める運動も展開された。予定通り、イギリスは一九四六年七月一日に、総督を派遣してラジャの支配権を継承した。サラワクは、ここにいたってイギリスの直轄植民地となったのである。

しかし、譲渡に不満を抱くマレー青年会は、ますます苛立ちを募らせ、決起の時を待つようになった。その時は、二代総督スチュワート(D. Stewart)が、一九四九年に着任して間もなくの一二月三日午前を訪れた。颯爽と群衆に答礼している総督をめがけて、カメラマンを装った一人のマレー人青年教師が、鋭いクリス(マレー剣)を横腹深く突き刺した。青年教師ロスリ(Rosli)はその場で逮捕され、総督は直ちにシンガポールの病院に送られたが、一週間後に絶命した。ロスリは裁判にあたって、「領土の譲渡に反対することは当然の権利であり、死を覚悟しているので後悔はない」と堂々と述べた。そして翌一九五〇年三月二日、クチンの監獄で二〇歳の生涯を終えたのである。⁽¹¹⁾

この事件以後、マレー青年会はじめサラワク譲渡反対協会も解散させられ、サラワクにおける譲渡反対運動には、表面上ピリオドが打たれた。

注(1・2) 前掲『砂勞越古今談』七一―二ページ。

(3) 同右、七三ページ。蔡史君編『新馬華人抗日史料』(文史出版有限公司、一九八四年)六〇三ページ。日本軍のシブ占領要請に関するこの二点の記録は、同じ執筆者(劉子政)によるものである。しかし前者では、略奪や首狩り族の蛮行のため、やむを得ず三人の代表が、日本軍のシブ占領を要請したと記しているのに対し、後者では三人の代表の行動を、漢奸の行動にたとえて非難している。もとより日本軍の侵略行為は、非難されて然るべき

であろう。ただ、中国人や華人の執筆したものの中には、このような「逆転現象」が往々見られ、また、時の経過とともに、被害を「拡大」している場合も少なからずある。

- (4) 前掲『砂勞越古今談』七四～七ページ。V.Mulle,op.cit,pp.67～8.
- (5) Sanib,“Malay Politics in Sarawak 1946-1966”1985,Oxford University,Singapore,pp.42～5.
Reece,op.cit,pp.198～205.Joanlo,“Glimpses from Sarawak's past”1986,AGAS(S) SDN BHD,Kuching,pp.92～5.
- (6) 謝詩堅『馬來西亞華人政治思潮演變』(友達企業有限公司、一九八四年)九八～一〇〇ページ。前掲『砂勞越古今談』七八ページ。
- (7) Sanib,op.cit,pp.45～59.
- (8) V.Mulle,op.cit,pp.68～9.
- (9) Reece,op.cit,pp.61～91.前掲『砂勞越古今談』七八～八一ページ。
- (10) Sanib,op.cit,pp.37～54.
- (11) Ibid,p.56.

直轄植民地下の政治改革

一九四六年七月一日から、一九六三年八月三十一日までの間、サラワクはイギリスの直接支配下におかれた。ブルック家からサラワクを受け継いだイギリスは、さらに政治改革を推進し、その手始めに一九四八年に「議院内閣制」を模型とした、地方議会を設置した⁽¹⁾。議員は総督府の指名によるもので、法令の制定権を授けられ、その

職権は学校、住居、消防、バス停、電力、水道、マーケット、道路などにおよぶ極めて広範なものである。⁽²⁾一九五六年にいたり、クチン市議会議員が公選によって選ばれ、議会の多数派の指導者が市長となり、市の執行部を構成した。⁽³⁾サラワク史上、初めての直接選挙であった。

一九五七年には、「立法議会」の組織とその権限を定めた、サラワクの憲法に相当する「基本法」が公布された。⁽⁴⁾立法議会は議員四五名で構成される。その内、二四名は各地の地方議会から間接的に選出され、一四名は官吏から選ばれ、四名は総督の指名、残る三名は官吏から選出されるが、死亡や退職の際には補充されず、最終的には四二名で構成される。立法議会は年二回以上開会し、法律の制定・改正と予算の審議にあたる。さらに植民地政府は、ブルック王朝の最高評議会の組織を改正・拡大し、議員を一〇名に増やした。総督府の総務、財政、司法の三局長は当然議員とし、立法議会から五名を選出、残る二名を総督が指名した。⁽⁵⁾最高評議会は、イギリス本国の上院（貴族院または元老院）に、立法議会は下院にあたる。これはサラワクの自治への第一歩であった。

一九五九年の十一月、基本法に基づいてサラワクの全面的な地方議会議員選挙が行われた。その翌年には、地方議会から「行政区(Division)」の議員を選出し、さらに行政区の議会から立法議会議員を選出した。こうした段階を経て、サラワクの住民は民主主義への認識を深め、自治能力を培っていったのである。

注(1・2・3・4・5) V.Mulle, op.cit, pp.70~4.

(6) ブルック家の支配するサラワクの領域は、二代ラジャの一九〇五年には、今日のサラワク州の領域にまで拡大した。人口が少なく、交通も不便、市街地も少ないため、全域を五つの“Division”に分け、第一から第五とした。小稿では便宜上、“Division”を「行政区」と訳したが、華字の新聞・図書では「省」としている。☆

華人政党「人連党」の結成

一九五〇年代に入り、中国における共産政權の発足の影響と、マラヤやシンガポールの左翼運動の影響を受けて、サラワクには共産主義の嵐が吹き荒れた。この点、隣接するサバは、経済至上主義の香港の影響が強い⁽¹⁾ため、左翼の反植民地運動がついぞ起こらなかったのとは対象的である。マラヤやシンガポール同様に、サラワクの左翼運動もまた華人が中心であった。一般的にサラワクの華人は、他の諸民族よりも比較的に経済的に恵まれ、教育に対しても熱心であり、したがって政治的な目醒めも早かった。

イギリスの植民地支配は、その利益に反しないことを前提に、自由放任であり、いわゆる「現地中心主義」の統治である。とくに教育に関しては、あまり関心を払わなかった。⁽²⁾こうした環境の中で、華人は独自の学校をつくり、中国本土さながらの教育制度を導入、教科書まで直輸入して、子女の教育にあたった。この教育環境の下で、中国共産党の成し遂げた革命は、サラワクの華人青少年の羨望の的となり、少なからぬ影響を及ぼした。そればかりか、華人の学校では中国本土から教師を招聘し、それらの教師の多くは、共産主義運動のオルグとイデオログの役割も果たした。華人学校は共産主義者の養成所だとさえいわれたほどである。⁽³⁾

サラワクにできた最初の左翼組織は、マラヤ共産党の指導を受けた張栄任⁽⁴⁾がクチンで組織した、一九五四年九月発足の「サラワク解放同盟」⁽⁵⁾である。反植反帝、サラワクの独立、社会主義政權の樹立を目的とする同盟は、翌年「サラワク先進青年会」を結成させ、外郭組織とした、両組織ともそのメンバーは、わずかの高校生を除き、ほとんどが中学生であった。⁽⁶⁾外郭組織を先兵として、華人の各界各層への浸透を図り、結成早々、クチンの華

人学校で、教師人事への不満を理由に授業ボイコットを指導し、当局の譲歩を勝ち獲った。⁽⁷⁾ 初陣の勝利に勢いを得たこれらの青少年たちは、怖いもの知らずかの如くに、「革命闘争」にばく進したのである。サラワクは今や、マラヤやシンガポールの左翼運動に呼応して、革命のるつぽと化した。

*

*

*

植民地政府は、華人学校が共產主義の温床となることを懸念して、学校管理に乗り出した。一九五五年に、華人学校の財政援助を表面上の目的とする「援助法令(Grant Code Regulations)」を公布したのである。それは同時に教育内容への関与でもあった。⁽⁸⁾ ところが財源を、「貿易許可書税」の新設に求めたものの、その税率が高く、貿易商人の間には不満が高まった。これを利用すべくサラワク解放同盟は、外郭組織を通じて反対運動を展開する一方、サラワク全土の商店街に一斉ストライキを画策し、成功させた。⁽⁹⁾ そして先進青年会は、植民地政府の譲歩である税率改訂を勝ち獲ったことにより、一般市民の好感をも得られるようになったのである。

植民地政府に好意的な市民の政治活動の育成と、共產主義者の活動への対策・抑制もあって、当局は政党結成の必要性を痛感するにいたった。当局の意図は、「御用政党」の結成により、左翼活動を分断し鎮静することにあった。他方、華人の中にも、とくに従来当局から経済的庇護を受けてきた階層を中心に、華人を代表して当局との交渉にあたり、また共產主義の蔓延を防ぐために、政党の結成を望む声があった。こうして一九五九年六月四日に、サラワク史上最初の政党である「人民連合党(Sarawak United People's Party ≡ SUPP、人連党)」⁽¹⁰⁾ が華人を中心にして結成されたのである。当初から当局は、諸民族にも政党の結成を呼びかけたが、政治的意識の低さからか、実らなかった。

人連党は結成したものの、植民地当局の意に添うのは僅かの上層部に過ぎず、絶対多数を占める中堅幹部と党員は、ほとんどが共産主義に共鳴する人々であった。⁽¹¹⁾ そのためこの党は、議会制民主主義を通じての独立獲得と、社会主義社会の実現を党綱領に謳っている。⁽¹²⁾ 共産主義者は人連党を通じて、自らの政治主張の実現が可能と踏み、党結成と同時に積極的に入党した。したがって人連党は、発足当初から極めて活動的であり、その発展ぶりには目を見張るものがあった。一九六二年六月までの三年間に、党員は三〇数名の発起人から五万人余りに増え、党の支・分部を五五にまで拡大し、まさに破竹の勢いでサラワク全土に勢力を広げた。⁽¹³⁾

注(1) この点に関しては、「紀要⑬」を参照されたい。サバ州では、まったくいいほど、共産主義者や共産党の活動がなかった。☆

(2) 植民地政府はマラヤでもボルネオでも、学校教育に関心を払わなかった。一九五〇年代初期の、マラヤの一般マレー人が通うマレー学校は、小学校四年程度のものでしかなかった。許子根「我国教育制度評析」、林水濠編『文教事業論集』（馬來西亞雪蘭莪中華大会堂、一九八五年）所収、六三ページ。

(3) 田農「森林裡的鬭争（二）」、香港月刊『東西方』第四期（一九七九年四月一〇日発行）所収、六二ページ。

(4・5) 同右。張栄任に関しては、実存の人物であったか否か疑問である。サラワクの華人問題研究家や、共産ゲリラの指導者であった黄紀作氏は、張栄任なる人物について、官憲の資料には記録されているが、実際に接触した者は誰一人いないと筆者に語っている。☆

(6) サラワクは現在でも、高等教育機関がない。一九五〇年代の中等教育機関としては、華人の学校しかなく、黄紀作氏を含め当時の左翼運動家は、青少年がほとんどであった。☆

(7) 「黄紀作談」。

(8) 前掲『馬來西亞華人政治思潮演變』一〇〇ページ。

(9) 「黄紀作談」。

(10) 李一文『人聯風雨二十年』（輝煌出版社、一九八一年）二ページ。

(11) 前掲『馬來西亞華人政治思潮演變』一〇一―一二ページ。

(12) 人連党「建党宣言」、人民連合党中央本部編『人民之声』第九卷（一九八〇年六月）四〇―一ページ所収。

(13) 前掲『人聯風雨二十年』三―五ページ。

華人の反マレーシア運動

マラヤ連邦のラーマン首相が、「マレーシア構想」を最初に発表したのは、一九六一年五月のことである。それはマラヤを中心に、シンガポール、サバ、サラワク、ブルネイを加えた連邦国家の構想であつた。⁽¹⁾この構想に真向から反対したのが、人連党である。人連党は、一九五七年に独立したマラヤ連邦が、マレーシア構想を通じてサラワクの支配を目論むものであり、同党の主張するサラワクの独立に反するものであるとして警戒した。そして構想発表の翌七月に、「マレーシア構想は、イギリス植民地主義者の着想であり、新植民地主義の産物である。断固反対する」旨の党声明を発表した。⁽²⁾続いて一九六二年末までほとんど連日、各地で一五〇回を上回る群衆大会を開き、声明を繰り返した。⁽³⁾反マレーシア運動は、同時に人連党の党勢拡大にも繋がった。

人連党の活動に対し、植民地当局を最も震撼させたのは、一九六二年六月四日クチンで開かれた、党創立三周

年記念の群衆大会であった。その日は、マラヤ・シンガポールの社会主義戦線とブルネイ人民党の指導者はじめ、各地の人連党の党員総勢五万人を集めた大集会となり、これを機に、植民地当局の共產主義者に対する弾圧と逮捕が始まった。その皮切りは、人連党副書記長兼中央本部教官局長の文銘権とその夫人王馥英(教員)、副書記長兼中央本部組織局長の黄紀作とその夫人雷皓瑩(教員)、中央委員の陳紹唐、新聞記者の沈清炎、教員の阮春涛の七名の逮捕であった。戦後中国からサラワクに渡った陳、沈、阮の三名は直ちに中国に送還され、残る四名は自ら要求して中国への政治亡命を認められた。⁽⁵⁾ 結局のところ、全員中国送りになったのである。反対運動はますます激化する一方となり、当局は同年七月に第二回目、人連党の地方支部幹部四名の逮捕に踏み切り、その後も相次いで大量逮捕が行われた。しかし、これら一連の逮捕行動は、人連党の中堅幹部を大量に失わせたとはいえ、マレーシア反対運動を阻止するどころか、逆に運動の火に油を注ぐ結果となったのである。⁽⁶⁾

*

*

*

反対運動のクライマックスは、一九六二年二月イギリスとマラヤ政府が合同で、住民意思確認の調査団を派遣した時に訪れた。この時、予定したデモと群衆大会が植民地当局に禁止されたため、人連党は街頭署名運動と戸別訪問を展開して、マレーシア構想反対に努めた。そして調査団が訪問する先々で、署名された名簿と意見書を提出した。⁽⁷⁾ これらの反対運動もまた、人連党の党勢拡大に繋がったことは、いうを待たない。

同年九月に、調査団の調査報告書が提出された。その結論は、サラワクに関して、マレーシア構想に反対する住民は三分の一、三分の一は支持、残り三分の一は条件付き支持であり、したがって全体的に賛成住民が多数を占めるというものであった。⁽⁸⁾ しかし人連党は、調査団の報告書は公平ではなく、住民の意思を正確に反映した

ものではないとして、直ちに国連への提訴を決定し、反対運動の効果を高めるため、代表団派遣に要する経費の街頭募金運動を展開した。一月末には、国連から代表団受け入れの通知が届いた。そしてブルネイ人民党の代表とともに、提訴することも決定した。ところが代表団の結成を終えた出発直前の二月八日、ブルネイ人民党の武装蜂起事件⁽⁹⁾が起こり、人連党との関連が当局に追究され、代表団の出発は禁止された⁽¹⁰⁾。

イギリス軍はブルネイ人民党の蜂起に対し、断固たる行動をとり、一週間足らずして鎮圧した⁽¹¹⁾。その一方、サラワクでの反マレーシア運動が、ブルネイの蜂起に呼応することを恐れ、人連党の幹部に対する最大規模の逮捕を展開した。これにより人連党の組織は事実上麻痺状態に陥り、逮捕を免れるため、多くの党員が南のインドネシア領カリマンタンの密林に逃れた。これらの人々が後日、「サラワク人民遊撃隊」と「北カリマンタン人民軍」の主力となり、十数年におよぶジャングルでの闘争を展開するのである⁽¹²⁾。このような状況の下で、初めてサラワクの全面的な選挙を迎えることになった。

注(1) 「紀要⑬」一六〇ページ、注(3) 参照。

(2・3・4) 前掲『人聯風雨二十年』五十六ページ。

(5) 「黄紀作談」。

(6) 前掲『人聯風雨二十年』七ページ。

(7) 同右、八十九ページ。

(8・9) 同右、一〇ページ。一九六二年二月八日の「ブルネイ人民党武装蜂起事件」は、大変唐突であったといわれる。当時人民党は、ブルネイ立法議会をほとんど占めており、武装蜂起によらずとも権力の掌握が可能であつ

た。しかも蜂起当日、党首はマニラにおり、サバやサラワクつまり英領ボルネオの一斉蜂起を企図したものであったにも関わらず、サバは不関与、サラワク解放同盟との事前協議もなかった。この事件により、ブルネイ人民党が壊滅しただけでなく、サラワク解放同盟が想定していた、議会制民主主義を通じての独立・社会主義国家の実現は、すべて狂わされた。「黄紀作談」。

(10) 前掲『人聯風雨二十年』一〇ページ。

(11) 前掲『馬來西亞華人政治思潮演變』一〇三ページ。

(12) 「黄紀作談」。

運命を分けた一票

植民地政府は当初から、華人以外の諸民族の政党結成をも呼び掛けたが、人連党に遅れること約一年の一九六〇年四月、領土譲渡に反対のマレー人を中心に、メラヌー人も加る「サラワク国家党(Party Negara Sarawak) P N A S、国家党」が結成された。さらに一年後の一九六一年三月に、イバン人を中心に、華人も含めた「サラワク国民党(Sarawak National Party) S N A P、国民党」が、同年十二月に譲渡に賛成のマレー人を中心とする「サラワク土着党(Berisan Rakyat Jati Sarawak) B A R J A S A、土着党」が、翌一九六二年七月に、マレーシア構想に賛成し、中国国民党支持の系譜を引く、華人を中心とする「砂華公会(Sarawak Chinese Association) S C A」と、イバン人を中心とする「サラワク保守党(Party Pesaka Anak Sarawak) P E S A K、保守党」がそれぞれ結成されたのである。人連党以外のこれらの政党は、当局の肝入りで結成されたものであり、すべから

くマレーシア構想に賛成するものである。⁽¹⁾

マレーシア連邦発足にさきがけ、一九六三年四月から六月の間、初めてのサラワク全域における選挙が行われた。この選挙は、いわば地方から「国政」レベルにいたるまでのものであり、マレーシア構想に対する住民の賛否を問うものでもあった。各政党とも熾烈な選挙戦を繰り広げ、マレーシア構想に賛成する各政党は、「サラワク連盟」⁽²⁾を結成した。その後、かつてサラワクの自治・独立を強く主張した、譲渡反対派の系譜を引く国家党は離脱して、人連党と選挙協力を結び、サラワク連盟に挑むことになった。⁽³⁾

*

*

*

この時の選挙の仕組みは、およそ次のようなものであった。まず地方議会だけは直接選挙により、二四の地方議会に議員四二九名を選出する。次に各地方議会は、五つの行政区の議会議員一〇九名を選出し、行政区議会議員から三六名の立法議会議員を選出する。それぞれの地方議会の多数派は、人口比率によって割り当てられた、行政区議会議員の全員を獲得し、さらに五つの行政区議会の多数派は、同じく人口比率で割り当てられた、立法議員の全員を獲得する。そして立法議会議員の多数派が、自治政府の内閣を組織する。

地方議会選挙の結果、国民党が四八、土着党が四四、保守党が四三、砂華公会が三、人連党が一一五、国家党が五九議席となり、サラワク連盟が多数を占める地方議会は一八、人連党と国家党は六となった。⁽⁴⁾しかし、地方議会が選出できる行政区議会議員は、前述のように人口によって差がある。したがって、一八対六という数字は、必ずしも人連党と国家党側の敗北を意味するものではない。むしろ相次ぐ逮捕で、組織が麻痺状態に陥った人連党は、選挙戦を通じて組織の再建を果たしたのである。

五つの行政区議会議員の選挙では、第一行政区議会は、人連党と国家党が多数を占めて各々五名、合わせて一〇名の立法議員を獲得した。第二、四、五の三行政区議会はサラワク連盟が多数を占め、一六名の立法議員を獲得した。一〇名の立法議員を選出する第三行政区では八地方議会で二七名の行政区議員を選出する。そして人連党と国家党が一議席を確保し、サラワク連盟が一三議席を獲得した。残る三つの区議会議席は、ビナタン(Binatang)議会から選出されるものであった。ところが、このビナタン議会の勢力分野は、人連党と国家党が七、サラワク連盟が七、無所属が一という配分であった。⁽⁵⁾このため、この無所属議員一名の確保いかんで、第三行政区議会の多数派となるか否かが決まり、同行政区議会から選出する立法議員一〇名の獲得も決定する。そしてこの一〇名の立法議員をどちらが獲得するかで、サラワク立法議会の多数派が決まり、内閣を組織する政党、つまり選挙協力を組む人連党と国家党か、サラワク連盟かが決定するのである。それだけでなく、マレーシア構想の賛否に大きく影響をおよぼすことになるのである。

このビナタン議会の無所属議員(イバン人)一人を確保するため、マレーシア構想の賛否両派は、まさに喜悲劇ともいふべき獲得合戦を展開し、結果的には、マラヤ連邦政府の全面的な応援を得て、賛成派のサラワク連盟が確保に成功した。⁽⁶⁾したがってビナタン議会が選出する三名の行政区議員とも、サラワク連盟が獲得し、第三行政区議会から選出する一〇名の立法議員をも確保した。こうしてサラワク連盟は、前記第二、四、五の三行政区議会から選出した一六名と合わせて、立法議会三六名中二六名の過半数を占めて組閣することになったのである。

このビナタン議会の無所属議員の一票が、反マレーシア構想の人連党と国家党側に投じられていたなら、状況はまったく逆転する。この一票は、サラワクひいてはマレーシア連邦にとって、大変重要な一票であった。まさ

にこの一票こそ、サラワク住民の意思を代表する立法議会における、マレーシア加盟決議案採決のキャスティング・ボートとなったのである。

注(1) J.Ritchie, "SARAWAK" 1987, Pelanduk Publications, Selangor, pp. 1~2. Sanib, op. cit. pp. 86~7.

(2) 「連盟(Alliance)」は、マラヤ連邦以来の「与党連合」ともいうべき政治的慣行であり、マレーシア政治の大きな特徴の一つである。マラヤでは、単一で人口の過半数を占める民族がない。独立前から、民族ごとの政党(マレー人のUMNO、華人のMCA、インド人のMIA)が連立して、「連盟」という与党を結成し、国政にあたると同時に、諸民族の利害を調整してきた。そのサラワク版ともいうべきものが、「サラワク連盟」である。

(3) 前掲『人聯風雨二十年』一一一~一二ページ。

(4) 前掲『馬來西亞華人政治思潮演變』一〇四~一〇五ページ。

(5) 同右、一〇五~一〇六ページ。

(6) 前掲『人聯風雨二十年』一五~一六ページ。このピナタン議会のイバン人無所属議員は、当選後逸早く姿をくらました。人連党の必死の「搜索」にも関わらず、家族さえその行方を知らなかった。サラワク連盟およびマラヤ連邦政府の共同作戦により、秘密裡にシンガポールやマラヤの豪遊に「誘拐」されたからである。同人は事の重大さは勿論、招待の理由も知らず、議会開会直前に姿を現し、ガードマンの人垣に守られる中で貴重な一票を連盟側に投じた。

連邦離脱の危機と回避

サラワクは一九六三年八月三一日に独立し、翌九月一六日にマレーシア連邦に加盟、その一つの州となった。⁽¹⁾加盟後、立法議会は州議会となり、自治政府首班がそのまま州内閣の初代首席大臣となった。この時の首席大臣は、イバン人の国民党の主席であるニンガン (Ningkan) である。

国民党はじめ、土着党、保守党、砂華公会で構成するサラワク連盟は、もともと安定した組織ではなかったが、その分裂の危機は、一九六五年の「土地改革法」案をめぐって露呈した。同法案の主旨は、ブミ・プトラにのみ与えられた保留地の売買を許すことにあり、したがって華人の砂華公会は賛成したが、マレー人の土着党は強固に反対した。そこで土着党は、保守党と国家党と結んで、「土着連盟 (Native Alliance)」を結成して、国民党のニンガン内閣の倒閣を図った。しかしニンガン内閣が、土地改革法案を撤回したため、保守党は反ニンガン陣営から離脱し、危機は一時的に回避された。⁽²⁾

この問題の背景にあったのは、ニンガン内閣が、マレーシア連邦が結成した際に調印した「マレーシア協定」における、サラワクの「特別的地位」を盾に、ことごとく連邦政府と対立してきたことである。⁽³⁾ その一つは、マラヤ連邦で従来禁じられてきた、ブミ・プトラの保留地の売買を、サラワクにおける適用の除外を図る、土地改革法案の提出であった。その他にも、たとえばイバン語、英語、華語をマレー語とともに公用語にし、マレー語のみを公用語とする連邦政府の政策と対立した。⁽⁴⁾ 連邦政府に対立的なニンガン内閣の存在は、連邦政府にとり好ましくないばかりか、連邦を離脱する懸念さえ抱かせた。

*

*

*

連邦政府首相のラーマンは、一九六六年二月にサラワクを訪ね、サラワク連盟の代わりに、再び土着連盟の復活を画策したが、成功しなかった。この時、保守党はニンガン内閣の倒閣に同意せず、マレー人の土着党は、連邦政府の主張に同調した。ニンガンは、土着党の書記長タイプ（Tad Merau人）を、州内閣の大臣職から罷免した。こうしてサラワク連盟は、「親ニンガン派」と「反ニンガン派」の両派に分かれ、激しい内鬭を展開することになった。保守党は土着党に加わり、反ニンガン派が州議会の多数派となり、ニンガン内閣の辞職を迫った。またラーマンも、ニンガンは既に議会の信任を失ったとして、辞職すべきと主張したが、ニンガンは拒否した⁽⁵⁾。そこでラーマンは、「マレーシア連盟」⁽⁶⁾ 理事会を通じて、保守党のタウイスリ（Tawisi）をニンガンに代え、サラワク州の首席大臣に任命した⁽⁷⁾。

七月にいたり、ニンガンとそ率いる国民党は、サラワク連盟を離脱するとともに、クチンの高等裁判所に、州元首の「タウイスリ首席大臣任命の違憲と無効」を提訴した。同裁判所は九月に判決を下し、ニンガンの訴えを全面的に認め、直ちにニンガンの復職となったのである⁽⁸⁾。このニンガンとラーマンの鬭争は、サラワク州と連邦政府の確執を助長し、サラワクを連邦離脱の方向にさらに押しやることになった。

ラーマンはサラワクの離脱を警戒して、共産党の活動の激化を理由に、サラワクの緊急事態宣言を發布した。これより、連邦議会はサラワク州憲法を改正し、「州元首は、州首席大臣が議会の信任を失った時に、これを罷免する権限を有す」とした。これを受けて、サラワク州議会は土着党、保守党、砂華公会の三党が連合して、ニンガン内閣の不信任案を通過させた。再びタウイスリがニンガンに代わり、州首席大臣に就任した⁽⁹⁾。そしてサ

ラワク州の連邦離脱も回避されたのである。

注(1) 「記要⑬」一五九～六〇ページ参照。

(2) Sanib, op. cit, pp. 111～3. 前掲『馬來西亜華人政治思潮演變』一二二～一二三ページ。

(3) この点については、サバ州にも同様の事態が生じていた。「記要⑬」二六七と二七八ページの注(13)参照。

(4) 前掲『馬來西亜華人政治思潮演變』一二二ページ。

(5) 同右。Sanib, op. cit, pp. 111～5. この時のサラワク州憲法には、議会の信任を失っても、首席大臣が辞職または議會を解散する規定はなかった。

(6) マレーシア連盟(Malaysian Alliance)は、マラヤ連邦の「連盟」組織をサバ、サラワクに拡大したものであり、マレーシアの連合与党ともいえる。

(7・8・9) Sanib, op. cit, pp. 115～7. 前掲『馬來西亜華人政治思潮演變』一二二～一二三ページ

政党の離合集散

タウイスリ内閣のもとで、おなじマレー人を中心とした土着党と国家党の両政党は、一九六六年二月に合併して、「ブミプトラ党(Bumiputera Party)」を結成、ヤコブ(Yakub、メラヌー人)が党主席に就任した⁽¹⁾。したがって今や、ブミプトラ党と保守党、および砂華公会の三党がサラワク連盟のメンバーとなったのである。ところがイバン人の保守党は、マレー人のブミプトラ党と常に反目し合い、同連盟の結束は必ずしも一枚岩とはいえないものであった。

一九六八年は、サラワク州議会がマレーシア加盟後、初めての解散・選挙を迎えた年であった。選挙の前哨戦において、連邦政府首相ラーマンは、イバン人が中心の国民党が、マレーシア離脱を企図していると批判した。

一方、首席大臣のタウイスリもまた、華人が中心の人連党が、マレーシア離脱を選挙の旗印に掲げていると非難した。連邦政府は両党の動き、つまり選挙キャンペーンを利用して、マレーシア離脱を宣伝することを恐れ、再び連邦議会にかけ、サラワク州議会議員定数を四八に増やし、解散を六ヶ月延期して任期を一九六九年五月までとした。⁽²⁾サラワクのマレーシア離脱の雰囲気鎮静化を図ったのである。

*

*

*

州議会任期の延長により、サラワクのマレーシア連邦加盟後最初の、連邦議会議員および州議会議員の直接選挙は、西マレーシア(マラヤ)各州と同時に行われることになった。マラヤでは一九六九年五月一〇日が投票日であるのに対し、サラワクは交通不便を考慮して、同一〇日から二二日までを投票期間とした。ところがマレーシアを震撼させた人種暴動の「五・一三事件」が起こったため、マレーシア全土に緊急事態が宣言され、戒厳令下におかれ、サラワクの選挙は中止とならざるを得なかった。この時、反マレーシア陣営の中でも、人連党の左翼の活動家が逮捕を恐れ、大量にジャングルに潜入し、サラワク人民遊撃隊や北カリマンタン人民軍に合流して、反マレーシアの武力陣営をさらに強化することになった。⁽³⁾

マレーシア政府は翌一九七〇年六月に、五・一三事件後の人心を占うこともあって、サラワクでの選挙を再開した。その結果、州議会では人連党が一二、国民党が一二、ブミブトラ党が一二、保守党が八、砂華公会が三、無所属が一という議席配分となった。しかしいずれの政党も、単独で州内閣を組織する議席数には満たず、連立

内閣の道を選ばざるを得なかった。ブミプトラ党、保守党、砂華公会による連立構想は、州の三大民族を網羅しているとはいえ、二三議席でしかなく、やむ得ずブミプトラ党と反マレーシアの人連党を中心に、さらに保守党と砂華公会を加えた連立政権、つまりサラワク連盟が、連邦政府の幹施で実現した。この時の首席大臣には、ブミプトラ党主席のヤコブが就任し、副首席大臣には人連党の書記長である楊國斯が就任した。⁽⁴⁾ 連立政権外に野党として残ったのは、イバン人国民党のみであった。

連邦政府としては逮捕につぐ逮捕と、左翼党員の地下潜行により、人連党内の反マレーシア勢力が減少している時を捉え、人連党を与党に取り込むことで、連立内閣の安定と人連党の反連邦の姿勢の転換を図った。また人連党も与党に転じることで、局面の打開を図る必要があったのである。反共の立憲君主国であるマレーシアの中で、社会主義を掲げる人連党が、連立とはいえ与党に与し、しかも連邦政府が幹旋したということは、まさに破天荒のことであった。これは五・一三事件以後、ラーマン首相に代わり全国行動理事会主席として全権を掌握したラザックが、従来の連盟をさらに強化し、政権基盤の拡大と安定を図り、各民族の代表である政党すべてを連立与党——「国民戦線(National front = N.F.、マレー語では Barisan Nasional = B.N.)」⁽⁵⁾とする構想に繋がるものである。

人連党は連立政府に与することによって、保留地、政治犯、新村、⁽⁶⁾ 民族の平等など諸問題の解決と、マレーシア協定におけるサラワクの特别的地位に基づく、教育、労働者受入れ、出入国管理の自主性および、各民族の言語の自由発展の原則の獲得が可能であるとし、党声明を発表して党内の動揺を抑え、かつ外部の疑惑に答えた。⁽⁷⁾ こうして人連党の、反マレーシアの党は表面上なくなったのである。

注(1) 前掲『馬來西亜華人政治思潮演變』一二三ページ。Sanib, op. cit, pp. 118~20.

(2) P. Searle, "Politics in Sarawak 1970-1976" 1983, Oxford University press, Singapore. pp. 37~41. 前掲『馬來西亜華人政治思潮演變』一二三~四ページ

(3) 「黄紀作談」。

(4) P. Searle, op. cit, pp. 96~8. 前掲『馬來西亜華人政治思潮演變』一九九~二〇三ページ。

(5) 長井信一『現代マレーシア政治研究』(アジア経済研究、一九七八年)三二一~八ページ。

(6) 新村とは一九四八年以降、マラヤ共産党の武装蜂起に対処するため、農村地帯における共産ゲリラとの接触・支援の遮断を目的として、設けられた居住地域をいう。これに倣い一九六二年以後、サラワクにも新村が作られた。「黄紀作談」。

(7) 前掲『人聯風雨二十年』二八~三〇ページ。

スリ・アマン・オペレーション

一九六二年以来、相次いで逮捕されたサラワクの共産主義者は、その数約三〇〇〇人と推定され、クチン効外の通弥「シックス・マイル・キャンプ」に収容された。逮捕から逃れた者は、カリマンタンとの国境地域の密林深く潜行した。この人々の闘争を精神的に支援したのは中国共産党であり、武器弾薬の供給、人員の訓練、基地の提供など直接的に支援したのは、スカルノ政権⁽¹⁾下のインドネシアであった。ある意味では、サラワクでの反マレーシア闘争は、スカルノ政権のマレーシア粉碎・対決に呼応したものである。

ジャングルでの闘争を指導したのは、一九六二年人連党の創立三周年直後に逮捕された黄紀作であった。黄は逮捕後、中国への政治亡命を認められ、中国に渡ったが、翌年四月ジャカルタに到着し、インドネシア政府の協力の下で三ヶ月間、軍事訓練を受けた後、サラワクとの国境西部のインドネシア側に、基地を構築した。ここで約五、六〇〇名からなる「サラワク人民遊撃隊」を組織し、自ら指揮官となった。その後間もなく、黄はさらに国境の東部に基地を建設し、約三〇〇名からなる「北カリマンタン人民軍」を組織し、遊撃隊と合わせて自ら司令官となり、十数年におよぶジャングルでの苦難に満ちた闘争が始まったのである。⁽²⁾

一方、黄と行動を共にした文銘権は、武装部隊結成後、政治委員を務め、一九六五年九月二九日に国際会議参加のため、ジャカルタから北京に飛び立った。ところがその翌日、インドネシアに「九・三〇事件」が起こり、政変により反スカルノの新しい政権ができた。インドネシアの新政権とマレーシアとの和解も進み、文はついに今日までサラワクに帰還することなく、北京に亡命生活の身である。⁽³⁾インドネシアの政変は、ジャングルでの闘争が続いていた遊撃隊や人民軍にも決定的な打撃を蒙らせた。

一九七〇年三月に「北カリマンタン共産党」の成立と、文の党主席就任が発表された。しかし当時、文は北京に滞在しており、党創立に立ち合うことは不可能であったばかりか、党の存在そのものが疑わしい。何故ならば、南のインドネシア政府軍と北のマレーシア政府軍の挟み討ちに、逃げ惑うのが精一杯だったジャングルの共産ゲリラが、武器の補給はもとより、食料の調達も不可能な状態での党結成は困難であり、必要性も認めにくいからである。また、その発表の根拠も甚だ曖昧なものであった。⁽⁴⁾

*

*

*

一九七〇年の人連党を加えた、サラワクの連合政府の発足は、ジャングルの共産ゲリラにも動揺を与えることになった。人連党はもはや反マレーシアどころか、マレーシア体制そのものであった。ジャングルのゲリラ戦士に対する、人間的な関心と同情はあっても、共産主義に基づく反マレーシア闘争には、対立的な立場にさえ立っていた。これは、ジャングルでの武装闘争に対処するための、「サラワク行動理事会」⁽⁵⁾の理事に、人連党の書記長が就任したことからも明らかであった。また当初、市民の密かな援助を受けていたジャングルのゲリラ戦士は、新村の設置により市民から隔離されたため、支援の道も閉ざされた。困難な状況下で脱走者が続出し、疑心暗鬼からの粛清も行われるようになり、状況をさらに困難なものにしていった。時の経過とともに、ジャングルでの闘争は、ますます絶望の淵に陥っていくのみであった。

*

*

*

司令官兼政治委員の黄紀作は、一九七三年の夏からマレーシア政府の呼び掛けに対し、密かに平和会談に応じるようになった。幾たびかの代表者同士の秘密会談の成果を経て、黄はサラワク州首席大臣兼州行動理事会主席のヤコブから、同年一〇月一三日付けの公式書簡を受け取った。ヤコブは黄との直接会見に応じること、会見を最高機密扱いとすること、黄がジャングルから出てくる時、および会談が失敗して再びジャングルに戻る時の通行の安全などを、書簡で保証した。⁽⁷⁾黄は会見に応じ、一〇月一九日、一七名のゲリラ代表を引き連れて、シマングン(Sinanggan)に赴き、首席大臣、連邦政府内務大臣、公安警察の、通称「スペシャル・ブランチ(Special branch)」⁽⁸⁾代表立ち会この下で、三日間にわたる談判に臨んだ。その結果、次の事項を骨子とした「了解事項備忘録」が調印された。一、ゲリラ隊員の市民権の回復、二、拘留中の政治犯の釈放、三、植民地政府により外国に

強制退去された者の帰国、四、管制区(新村)の撤廃、五、ゲリラ隊員の外国移住の許可、六、ゲリラ隊所有の武器弾薬の自己廃棄の承諾、である。⁽⁹⁾

会談が成攻裡に終わった後しばらくの間、ジャングルから出た隊員約六〇〇名は、政府が用意した秘密の場所
で、社会復帰に備えて訓練を受けた。一九七四年三月四日、首席大臣ヤコブは黄紀作とともに、「スリ・アマン・オペレーション (Sri Aman Operation)」と名づけられた政治行動の経緯を、正式に発表したのである。⁽¹⁰⁾

スリ・アマンはマレー語の「平和」にあたり、したがってこの重大な政治行動は、「平和行動」と訳すべきであろう。一般的にこうした政治行動は、ゲリラ側の「投降」と表現されるところである。しかし、政府側もゲリラ側も「投降」とは認めない。黄紀作は、とくにこの点を強調している。要するに、マレーシア政府は、「実」を取り、黄らは「名」を取ったのである。こうして「スリ・アマン・オペレーション」なる、極めて高度かつ巧妙な政治用語が創出されたのである。この苦心の作の裏には、今日でもタイとの国境地帯で活動を続けている、より厄介なマ
ラヤ共産党の投降を引き出す、マレーシア政府の思惑があり、そのモデル・ケースでもあったのであろう。⁽¹¹⁾

スリ・アマン・オペレーションに続いて、シックス・マイル・キャンプに収容されていた政治犯の釈放が相次いで行われた。釈放の条件は、マレーシアを認めること、武力闘争を放棄すること、地下組織との関係を断ち切ることを公開で宣言することであつた。⁽¹²⁾ 投降を拒んだ一部のゲリラ隊員をジャングルに残しながらも、サラワクには漸く平和が回復された。この時、マレーシア全土にまた総選挙が訪れようとしていた。

(注1) サラワクは幅員広大で人口が少ないために、地名のない土地がいたるところにある。「シックス・マイル・キャンプ」は、クチンから六マイルにあつたことから由来する呼び名で、政治犯だけを収容する刑務所である。

元政治犯であり、『人聯風雨二十年』の著者でもある李一文氏談。☆

(2) 「黄紀作談」。

(3) 文銘権のジャングルでの闘争生活は、わずか二年半に過ぎず、その後北京にとどまり今日にいたっている。ジャングルの同志との連絡はほとんど不可能で、間接的な通信しかできなかった。しかし、それでも「北カリマンタン共産党主席」という身分のまま、共産主義世界のさまざまな会議や催事に参加しているという。「黄紀作談」。

(4) 北カリマンタン共産党の結党を、黄紀作氏らが知ったのは、マラヤ共産党の放送を傍受したサラワク州政府が、ジャングルのゲリラに向けて再放送した時であった。このマラヤ共産党の放送は、北京からの報道によるものとされていた。「黄紀作談」とすれば、北カリマンタン共産党は、現地サラワクの関知しない北京で結党されたものと解釈すべきか、サラワク州政府の策謀であったのか、のいずれかであったと思われる。党の存在自体が曖昧な上に、関係者個々人、文献によっても党名が統一されておらず、「サラワク共産党」とされる場合もある。以上のことから筆者は、党の存在に疑問を抱く。

(5) サラワク行動理事会は、五・一三事件時に発足した。緊急事態に対処するための超憲法的な権限を持つ臨時機関である。しかしその後も、ジャングルでの共産ゲリラに対処する必要から、存続し続けている。「黄紀作談」。

(6) 前掲『馬來西亞華人政治思潮演變』二〇三ページ。

(7) 筆者所蔵、首席大臣ヤコブの黄紀作氏宛英文書簡のコピー。

(8) マレーシアの華人の間では、公安警察を「政治部」と称しているが、その他の民族は「スペシャル・ブランチ」

と呼ぶ。共産主義者への対処が、主たる役割であり、マラヤ共産党からの転向者が多い。☆

(9・10・11) 「黄紀作談」。

(12) マレーシア政府にとり、サラワクの共産ゲリラよりも、むしろタイ国境地帯で活動が続けているマラヤ共産党の「投降」が狙いである。しかし最近(一九八七年三月)、タイ政府に投降したマラヤ共産党ゲリラに対し、マレーシア政府は特赦を与えなかった。ゲリラがマレーシアではなく、タイ政府に投降したからである。☆。東南アジア調査会『東南アジア月報』(一九八七年四月号)五八―九ページ。

(13) 元政治犯、李一文氏談。

再び政党の離合集散とダヤク党の結成

五・一三事件以後、国家の全権を掌握したラザックは、一九七〇年九月、ラーマンに代わり二代首相に就任した。ラザックは就任後、諸政党の大連合を図るべく国民戦線(NF)の結成に腐心し、一九七四年の総選挙は、国民戦線の旗印(「天秤」のシンボル・マーク)で戦った。それを受けてサラワクでも、サラワク連盟が「サラワク国民戦線」となって、総選挙と州議会選挙に臨んだ。その前年の一九七三年には、サラワク連盟内の保守党がラザックの説得により、プミ・プトラ党と合併して、「土着保守党(Parti Pesak Bumiputra Bersatu || PBB)」⁽¹⁾となり、また州首席大臣の工作により、人連党が砂華公会の吸収合併に成功していた⁽²⁾。したがって、選挙戦に臨むサラワクの政党は、土着保守党と人連党が組む国民戦線と、国民党との対決となったのである。

サラワク州議会の選挙では、国民戦線はスリ・アマン・オペレーション以後、平和の回復と政治情勢の安定、

政治犯の釈放、マレーシア・中国国交の建立などから、樂觀的であった。ところが選挙の結果は、国民戦線が六議席減らして三〇議席（土着保守党一八、人連党は二議席減の二二）となり、国民党が六議席増やして一八議席となった。⁽³⁾この選挙結果で最も注目されるのは、副首席大臣の楊国斯の落選であり、野党国民党の若き新人、L・モッギー（Leo Moggie）の当選である。⁽⁴⁾楊はスリ・アマン・オペレーションの責任者の一人であり、モッギーはオーストラリア留学から帰国した、イバン人のホープであった。楊の落選と人連党の議席減は、与党に与したことへの不満の現れ、国民党の大躍進は、野党という攻撃に有利な立場と、イバン人の民族的目醒めに負うところが大であったとされている。小幅な州内閣改造だけで、ヤコブは引き続き州政を担当した。

一九七六年六月にいたり、一〇年間野党の立場にあった国民党は、書記長モッギーと連邦政府との妥協により、連邦および州の国民戦線に加盟した。⁽⁵⁾これによりサラワクは、「無野党」状態となったのである。しかし、全政党が「サラワク国民戦線」というオムニバスには乗ったものの、結局はバスの中での新たな対立が始まることになる。しかもこの対立は、与野党間の対立にも増して深刻なものとなり、次の一九七九年の選挙は、これを如実に示すことになった。

*

*

*

一九七八年は、総選挙の年であった。本来、州議会選挙も同時に行う予定であったが、サラワク国民戦線の内紛がやまなため、任期一杯の一九七九年までに延ばした。内紛の直接の原因は、州内閣の閣僚ポストの配分はもとより、最も重大なのは議席数の割り当てに対する不満であった。国民党は、一九七四年の州議会選挙での当選議席数をそのまま、各政党の割り当て数に定めることを主張し、当然、土着保守党と人連党は強く反発した。

当時は、国民党が野党という有利な立場にあったから、与党の土着保守党と人連党の地盤区さえ奪い、一八議席も獲得できたが、今では国民戦線の一員であり、したがって一八選挙区の割り当てを要求するのは不当だと反発したのである。しかし、国民党は最大多数民族の代表であり、当然の要求と主張して譲らなかつた。⁽⁶⁾結局、国民党の要求通りの選挙区割り当てで、一九七九の選挙戦に入った。

このマレーシア加盟後の第三回州議会選挙は、予想通りの大混戦となつた。各政党とも、割り当てられた選挙区以外の選挙区に、無所属候補を仕立て、同じサラワク国民戦線加盟の「友党」の公認候補の足を引っ張り、仕立てられた無所属候補はそれぞれ独自のシンボル・マークで、国民戦線の「錦の御旗」天秤マークに挑んだ。この時の無所属候補は、四八選挙区で総勢五三名に達している。⁽⁷⁾選挙の結果、土着保守党は一八議席を辛うじて守り、人連党は一議席減らして一一、国民党は二議席減らして一六、無所属三の議席配分となつた。土着保守党の党首ヤコブは、引き続き組閣した。⁽⁸⁾この組閣で注目されるのは、ヤコブ自ら新設の「森林大臣」を兼ねたことである。ちなみにヤコブは、もともと森林利権を掌握してきたが、別名利権大臣」と呼ばれる森林大臣となつて、一層財力と政治力をつけたといわれる。

一九八一年三月、連邦政府の直轄区担当大臣である、土着保守党のタイプは、突如辞職して、同月一〇日に行われたセバンディ (Sebandi) 選挙区の補選で、無投票で州議員に当選した。⁽⁹⁾これを受けて、首席大臣のヤコブは三月二五日に辞職し、直ちにタイプが首席大臣に就任した。タイプはヤコブの甥であり、この首席大臣交代は一族間での政権タライ回しであつた。タイプの推薦で、ヤコブは翌四月二日に州元首に就任した。⁽¹⁰⁾

*

*

*

第三回州議会選挙後、国民党は二議席減をきっかけに、内紛が表面化した。党書記長のモッギーを中心とする急進派が、インバ人の政治的・経済的処遇の早期改善を主張するのに対し、党主席エンダウィ（Endawie）を中心とする穏健派は、諸民族との協調を図りながらの改善を主張していたが、一九八〇年七月、エンダウィの党主席辞任を機に、両派は党役員の配分をめぐる正面衝突した。一月の臨時中央委員会では、穏健派の黄金明の党主席代行、急進派のモッギーの党書記長、および両派の役員配分が話し合われ、勢力の均衡により一応の平穏が保たれた。しかしそれも束の間、一年後の定例中央委員会において、党主席のポストをめぐる、再び鋭く対立した。前主席の支援を得た穏健派が、全面的な勝利を納め、黄金明が正式に党主席に就任、急進派はモッギーを含め全員、要職から外された。急進派を安撫するため、黄金明はモッギーを副主席に任命した。しかし、急進派はこれにも満足せず、次の一九八二年の総選挙では、党に割り当てられた選挙区に無所属候補を仕立てて、穏健派の候補を妨害した。その結果、国民党の連邦議会議員は、九議席から六議席に減ったのである。翌一九八三年六月、党は党紀粛正のため、急進派が占める州農業発展大臣の除名に踏み切り、党争は最高潮に達した。同年七月、連邦議員六名と州議員一名を含む急進派は脱党して、イバン人を中心に原住民族だけからなる新党「ダヤク党（Dayak National Party）」を結成し、モッギーが党主席に就任した。国民党はここにいたって、完全に分裂したのである。⁽¹⁾

*

*

*

国民党は、ダヤク党に加わった党員を全員除名した。ところが連邦政府、州政府とも、ダヤク党に走った、国民党の推薦による連邦および州内閣の大臣に対し、なんら処分もせず放置した。この政党政治の常規を逸した処

置は、明らかに首相マハティールおよび首席大臣タイプが、モッギーらの行動を黙認したことを意味するものである。国民党は、重ねてこれに抗議し、ダヤク党の連邦および州国民戦線への加盟申請に、絶対反対であることを繰り返し表明した。

事態收拾策として案出されたのは「バリサン・プラス(Berisan Plus II 与党の付け足し)」という名案であった。連邦および州の連合与党は、いずれも国民戦線(National Front = Berisan Nasional)のメンバーである。国民党の反対により、ダヤク党の国民戦線加盟は認められず、さりとて連邦議会および州議会で、国民党にも劣らない勢力をもつダヤク党を、与党から排除することもできず、ましてやサラワクの最大多数民族を「敵」に回すこともできない。そこでダヤク党を「バリサン・プラス」とすることで、妥協を図ったのである。これは複合民族国家ならではの妙案であり、それもマレーシアでなければ不可能であつたろう。

注(1・2・3) P.Searle, op.cit. pp.150~1. 前掲『馬來西亞華人政治思潮演變』三五二ページ。

(4) 前掲『人聯風雨二十年』三一―二ページ。林靖「回顧砂州政壇之演變(二)」(『星洲日報』一九八七年三月一六日付)。

(5・6) J.Ritchie, op.cit. pp.2~3.

(7・8・9) 林靖、「回顧砂州政壇之演變(三)」(『星洲日報』一九八七年三月一七日付)。

(10) J.Ritchie, op.cit. p.3.

(11) 林靖「砂国民党的興衰」(『星洲日報』一九八七年三月一九日付)。林靖「回顧砂州政壇之演變(四)」(『星洲日報』一九八七年三月二〇日付)。

(12) J.Ritchie, op.cit, p.4. 前掲「砂国民党的興衰」。

三月危機・木材政治・ダヤッキズム

一九八三年一二月に、第四回州議会選挙が行われた。この選挙においては、国民党とダヤク党との間の「不明朗」な関係が清算された。国民党は国民戦線にそのまま残り、ダヤク党は、独自のシンボル・マークで選挙戦に臨むことになったのである。こうしてイバン人はじめ原住民族は真二つの陣営に分かれ、熾烈な戦いを演じた。とくに民族の違いを越えたと標榜する国民党は、正面からダヤク党の攻撃を受けるばかりでなく、後から土着保守党と人連党の仕立てた、無所属候補の突き上げも受け、まさに前門の虎に、後門の狼の境地にあった。選挙の結果、予想通り国民党は、前回の一六議席から八議席減らして半分になった。初陣のダヤク党は野党として善戦し、七議席を勝ち獲った。土着保守党は一九議席、人連党は一一議席、無所属は三議席となった。選挙後、無所属の二議席が人連党に、一議席がダヤク党に入党した。八議席となったダヤク党は、選挙後正式に国民戦線への加盟が認められた。⁽¹⁾

*

*

*

州元首のヤコブは就任以来、甥の州首席大臣タイプとの間の感情的もつれから、次第に対立を深めていた。そして一九八五年四月一日、ヤコブは再任の推薦を得られずに、州元首を退任した。退任後、伯父・甥の仲は悪化の一途をたどり、ついに敵対関係となり、ヤコブは甥の失脚の機会を狙うようになった。⁽²⁾

一方タイプは、ダヤク党がヤコブの政治的な行動に、関心を払っていることに極めて警戒的であった。しかも

ダヤク党が、「バリサン・プラス」という異例ともいえるべき好遇に際し、当然視して顧みなかったこともさる不満であった。これらのことから、やがてタイプはダヤク党の仇敵である国民党を、ことごとく好意的に庇護し、ダヤク党の発展を妨害するようになった。

一九八六年にバタンアイ(Batang Ai)の州議員選挙区で、国民党議員の死亡による補選が行われ、ダヤク党が国民党の候補を破った。州議会でのダヤク党の勢力は、さらに一議席増え、八となった。国民党は逆に一議席を減らし七となり、両党の勢力は逆転したのである。⁽³⁾これでダヤク党は国民党を抑えて、イバン人はじめ原住民族を代表する立場となった。こうした政治情勢を見極めたヤコブは、タイプとも反目するダヤク党を利用すべく接近を図った。

*

*

*

一九八七年二月、ダヤク党の党代表大会は、先の州議会選挙において、国民戦線の候補に挑んだ、三人の無所属候補の入党を公然と認めた。このことは、サラワク国民戦線に加盟する各党はもとより、国民戦線主席のタイプにダヤク党の処罰の必要を公言させた。⁽⁴⁾しかし、ダヤク党所属の州閣僚の罷免など処罰の検討の最中に、いわゆる「三月危機」が起こったのである。

三月一〇日、クアラルンプールの高級ホテル「ミング・コート」で、サラワクの州議員二八名が記者会見を行い、首席大臣タイプに対する不信任を表明し、その辞任を要求した。これが三月危機の始まりである。⁽⁵⁾ダヤク党議員全員のみならず、全政党にまたがる二八名の内訳は、イバン人一七名、マレー人九、華人二である。この数字からも伺い知るように、イバン人が中心であり、イバン人の「反乱」であったともいえる。

危機に瀕してタイプは、素早く対処した。まず、自家用ジェット機で首都に飛び、首相の了解を得て一二日に州議会の解散を宣言した。また「造反」のダヤク党を除く、国民戦線加盟の土着保守党、国民党、人連党の在クチンの幹部を土着保守党本部に招集し、支持を取り付ける一方、ダヤク党の国民戦線からの除名を決議した。続いて一九日に、選挙委員会が議員立候補の届け出を四月六日、投票日を同一五、一六日にすることを発表した。⁽⁶⁾また議会解散を決定するや、密かに反対派に対する「兵糧攻め」を実行した。まず反対派のリーダーである、ヤコブ関連の森林伐採許可書一一件の取消しを断行した。これにより反対派の態度軟化を図ったのである。しかし効果がなく、さらに反対派関連の森林伐採許可書一四件を取消した。⁽⁷⁾タイプ陣営は、与党という有利な立場から、行政機関と潤沢な「木材資金」を存分に活用できた。立候補届けを終えるや否や、ヘリコプター数機をチャーターし、最新鋭のモーターボートを大量に購入して、サラワク全土の選挙区を隅なく回り、手土産付きの戸別訪問を展開した。⁽⁸⁾

片や反タイプ陣営は、クアラルンプールでの行動だけでも、タイプの州首席大臣引き降ろしが可能、と判断していたが実現しなかったばかりか、逆に予想外の議会解散の事態に、対処しなければならぬ羽目に陥った。しかも立候補から投票日までの期間が、法定最小限の一〇日間に定められたことは、大きな痛手であった。マレーシアの選挙は、「シンボル・マークの選挙」⁽⁹⁾といわれる。反タイプ陣営のダヤク党以外の者は、いずれも国民戦線加盟の政党のいずれかに所属していたが、「造反」と同時に除名されており、選挙戦に臨むには、新しいシンボル・マークを設計・登録し、短期間に有権者に浸透させなければならなかった。サラワクは幅員広大、交通不便なところで、都市部は別として、一〇日間では選挙区を一巡するだけでも困難である。その上、もともとサラワ

クは全国でも、最も選挙にカネがかかるところといわれている。それだけに森林伐採許可書の取消しは、関連業者からの献金が反タイプ陣営には入らないことを意味し、頼りにしていた政治資金源がなくなつたことは、まさに「兵糧」の道を閉ざされたに等しい。反タイプ陣営は、極めて不利な状況で選挙戦に臨まざるを得なかつた。

*

*

*

イバン人はじめ原住民族は、サラワクの最多数民族であるだけでなく、都市部以外ではかなり平均的に分布し、選挙区も有利に画定されている。したがってサラワクに政党が結成された当初から、保守党を除く各政党は「民族を越えた政党」を標榜して、原住民族の取り込みを図り、政治的に利用してきた。とくに国民党はイバン人中心、一部華人の、人連党は華人中心、一部イバン人の政党であつた。イバン人だけの保守党は、一九七三年にマレー人中心、一部メラヌー人のブミプトラ党に吸収されている。一九八三年に国民党が分裂し、ダヤク党が発足するまで、真のイバン人の政党はなかつた。イバン人はじめ原住民族は、今日でも経済的に最も恵まれない集団である。例えばブミプトラでありながら、森林伐採の権利を与えられず、木材関連の恩恵に浴することもなく、せいで伐採現場での下働き人夫に過ぎない。政治的にもニンガン政権以後、権力の外側に立たされてきた。このような不利な境遇を打開すべく、ダヤク党結成以来一貫して、党主席のモッギーは原住民族の団結を訴え、原住民族により有利な政治・経済環境をつくることを目指してきた。ダヤク党が頼みとするのは、民族の自覚と団結のみである。

ヤコブはダヤク党の不満を利用すべく、しきりに接近を図り、モッギーもまたヤコブとタイプの反目を利用すべく、ヤコブに秋波を送り続けてきた。ヤコブはダヤク党の議員数に着眼し、モッギーはヤコブの、木材絡みの

豊富な資金に照準を定めていた。三月の政治危機の背景には、互いに利用するという両者の思惑があったのである。

* * *

個人的な感情のもつれから、タイプ政権の打倒を目論むヤコブの行動は、「無名の師」とされ、始めから批判的となっていた。また、ダヤク党を利用したことは、原住民族つまりダヤク族の「ダヤッキズム(Dayakism)」⁽¹¹⁾を呼び醒ます結果となり、複合民族社会にとって最も忌むべき行動と非難された。この点、民族の融和と協調を最大の政治課題とする複合民族社会サラワクの、州首席大臣と州元首を歴任したヤコブにとり、不見識の誹りを免れず、消し難い汚点となった。四月一五・一六日の選挙で、ヤコブの政治経歴にも関わらず、長い間保持してきた選挙区マツダロ(Matu Daro)での惨めな敗北がそれを示している。⁽¹²⁾

選挙の結果四八議席中、与党サラワク国民戦線所属の土着保守党が一四、人連党が一一、国民党が三、合計二八議席となり、野党ともいへば反対陣営のダヤク党は一五議席を獲得して最大政党となり、ヤコブ率いる「マレーシア人民党」⁽¹³⁾は五、合計二〇議席となった。⁽¹⁴⁾過半数を四議席越える僅差で、国民戦線が引き続き組閣した。しかし、国民戦線の二八議席中、八議席(土着保守党四、人連党二、国民党二)がイバン人であり、⁽¹⁵⁾ダヤク党の一五と合わせてイバン人が二三議席となったことは、このたびの選挙が「ダヤッキズムの爆発」といわれるのも、頷けるものである。

選挙後、州国民戦線復帰の呼び掛けに対し、ダヤク党は一向に応じる気配を見せず、逆に多数派工作を密かに進めている。その狙いは、国民戦線各党に所属する八名のイバン人議員の抱き込みにあることは明らかである。

サラワクの政治事情は、これからも目を離せない状況にあるといわざるを得ない。

注(1) 前掲「砂国民党的興衰」。前掲「回顧砂州政壇之演变(四)」。

(2) 前掲「砂国民党的興衰」。

(3) 前掲「回顧砂州政壇之演变(四)」。

(4) (2)に同じ。

(5) “New Straits Times”, March 11, 1987, 前掲『東南アジア月報』(一九八七年三月号)六三ページ。

(6) 「星洲日報」(一九八七年三月二一、二〇日付)。前掲『東南アジア月報』(一九八七年三月号)六三―四ページ。

(7) J.Ritchie, op.cit, pp.87~91.

(8) 「南洋商報」(一九八七年四月九日付)。

(9) 「紀要⑬」一七〇ページ、注(3)参照。

(10) J.Ritchie, op.cit, pp.1~3. 前掲『人聯風雨二十年』三―四ページ。

(11) この場合、ダヤッキズムはサラワクの華人、マレー人を除いた「原住民族主義」と解すべきであろう。

J.Ritchie, op.cit, pp.53~6.

(12) 「星洲日報」(一九八七年四月一八日付)。

(13) 既成政党のダヤク党は別として、解散から立候補届けまでの期間が短かったため、ヤコブ率いる反対派は、政党の結成、届け出、選挙委員会の認定などが時間的に不可能であった。やむを得ずヤコブは、かねて休眠中の「マレーシア人民党(Petinas)」の党名とシンボル・マークを借りて選挙戦に臨んだ。皮肉にも同党は一九七八年、

反ヤコブ州内閣を掲げて結成されたものであった。「星洲日報」(一九八七年三月一五日付)。

(14・15) 「南洋商報」(一九八七年四月一八日付)。

「投票箱から政権が生まれる」——結びにかえて

複合民族社会はサラワクに限らず、近くはスリランカのヒンズー教のタミル人と、仏教のシンハリ人のように、民族の対立・衝突が深刻な国内・国際問題になっている国もある。しかしサラワクでは、およそ一九五〇年代以降、共産主義者の武装革命を除き、民族間の衝突・武力対決の事態は生じていない。それは、イギリスの直轄植民地時代に始まる、議会制民主主義と法の支配の浸透によって、民族間の利益がある程度調整され、対立が武力衝突に発展する前に回避されてきたからだといえよう。

マレーシアにはマラヤ連邦以来の、民族ごとの政党の連合——連盟と国民戦線の政治的慣行があり、サラワクにも援用されている。マラヤ同様サラワクも、単一で人口の過半数を占める民族はない。したがってマラヤ連邦で成熟した、連盟や国民戦線の形態を、そのままサラワクにも適用できたのであろう。理想としては、民族ごとの政党ではなく、民族の違いを越えた政党を通じて、諸民族の融和を図り、利害を調整することが望ましく、サラワクに政党が結成された当初の、国民党や人連党はまさにこの理想に則ったものであった。二〇数年間の政党の離合集散により、結果的には民族ごとの政党に再編成され、近年この傾向はとくに顕著である。「ダヤッキズムの爆発」とされるダヤク党の出現と成長は、マレー人と華人に対抗する、原住民族の民族的目醒めであったにほかならない。理想とされる政党のありかたに反するこの傾向は、ますます顕著になることが予想され、今後も

政党の連合である、連盟や国民戦線という政治組織の継続で、サラワクにおける複合民族社会の、民族間の利害を調整していくことになる。

またサラワクにおいては、政治的な解決という手段も講じられてきた。スリ・アマン・オペレーション、バリサン・プラスという手法は、まさに複合民族社会ならではの智恵といえよう。とくに政治解決の極緻ともいうべきスリ・アマン・オペレーションは、ジャングルのゲリラ戦士が、共産主義を放棄することなく、武器と引き替えに市民権の回復を求めたもので、いわば鉄砲の代わりに投票用紙を求めたことになる。またダヤク党のように、かつての「首狩り族」を中心とした原住民族が、多数を頼みに武力に訴えることなく、ひたすら民族の自覚と団結を鼓舞することで、選挙を通じて政治の主導権を掌握しようという行動もある。これらはサラワクにおける民主主義の成長であり、もはや「鉄砲の下で政権が生まれる」のではなく、「投票箱から政権が生まれる」ことを示すものであろう。